やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」（青森）発行

誌　　名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	21 / 2007 / 1-3
タイトル	博物館と標本
著　者　名	会長　室谷洋司

緒言　博物館と標本

やぶなべ会会長　室 谷 洋 司

ニガナに吸蜜するオオルリシジミ。
　かつてこのチョウは岩木山の名蝶として全国的に知られていた。この草原が開発で消えるとともにチョウも絶滅していった。(撮影：岩木山山麓奈良寛池付近、1963 年 6 月。国産カラーフィルムが出始めたころの写真。)

　生き物調査に関心があるものにとって、標本の大切さが身に染み付いている。私達のまわりには何千、何万種という動植物がいるが、それぞれの種について調査研究対象となった個体が標本として博物館とか研究機関などに大切に保管されている。

　その生きている種が十数年前から急速に衰亡の危機に直面している。チョウ類のなかでもシジミチョウの仲間でオオルリシジミという優美な種が青森県に生息していたが、1979 年の記録を最後に姿を消し、悲しいことに青森県レッドデータの絶滅種第 1 号となってしまった。(オオルリシジミは本誌の雪形の項に関連記事。)

　このオオルリシジミについて、全国のチョウ専門の学会誌に書いてくれないかと原稿依頼があった。タイトルは「東北地方のオオルリシジミ」で内容は、その発見の歴史と絶滅の経緯。これはおおごとだと思った。青森県のことについては、本種がまだいっぱい飛んでいた 1950 年代から資料を集めていたので問題はない。東北地方にはほかに岩手県と福島県に分布していて、青森県と同様にいずれでもごく限られたところにしか生息していない。しかも福島県の場合は歴史的にたった 1 回しか採集されていないのである。その証拠をキチンと提示しなければ今回の論文は体をなさないだろう。

　採集がたった 1 回きりとは奇妙な話だが、今から 100 年ほど前の 1904(明治 37)年に、福島県岩代郡若宮村(現会津坂下町)に住んでいた新国豊七という昆虫好きのひとが、ここでオオルリシジミを捕まえて、著名な高野鷹蔵という研究家に標本を送った。高野氏はすぐに「オオルリシジミ岩代に分布す」と「博物之友」という全国誌に発表した。ところがその後、福島県でもチョウの研究家は増えていったが、このチョウはどこにでもいる種ではないので再び記録できたひとはなく、また発表された文献が余りにも昔のことで、しかも何処でも読めるものでなかったので、新国が採集したところを調べようともしなかった。いつの間にかチョウの多くの図鑑類や解説書から福島県のオオルリシジミは抹消されてしまったのである。

　ところが、新国氏が採集した標本は、最初の所有者から「佐竹コレクション」というところに譲渡され、その後、国立科学博物館に入っていたのである。この事実をつきとめたのは科博の名物昆虫学

者であった故黒澤良彦博士で、今から 20 年近く前に「標本の存在」で福島県のオオルリを復権させたのである。私はこのことを思い出して、すぐ黒澤氏の後任、大和田守博士に標本確認と撮影をしたい旨の連絡を差し上げた。11 月末のことである。

12 月 12 日午後、新宿の百人町にある科学博物館分館を訪ねた。「幻のオオルリシジミを見ることができる!」。なかば興奮気味だができるだけ平静を装い、十数年前にお会いしたことのある大和田氏にまず今回の趣旨説明をした。同氏は、ハイそうですかと「会津の標本をこの部屋に持ってきますか?」という。いやいや、収蔵庫で見たいですね。せっかくの機会である。科博ではどのように標本を収蔵し管理しているのか、好奇心はその辺にもあった。

何箇所かのゴツイ扉を開けては閉めて、可動式の書架のお化けが並んでいるような大部屋に入った。ここには約 1 万箱の標本箱が収納されているという。少ないか多いかは比較する尺度がないのでどうしようもないが、ただ 1 箱には小型のチョウだと 200～300 匹は入る。その一角に「佐竹コレクション」があって、そこにくだんの会津のオオルリ♂♀が極めて良い状態で鎮座していた。むさぼるようにその標本を眺めた。ここでその写真をお目にかけたいのは山々だが、チョウ類専門学会誌のための探索だったので優先権はそちらである。

チョウの羽の裏表を仔細に写真に収めて一段落してから、大和田博士の内緒話を聞いた。「半月ほど前に標本を見たい、写真を撮りたいと連絡を受けたとき、もしなければどうしようとアルバイトとともに一生懸命探したんです。おかげ様で古いコレクションは大分、整理がつきました…」。同氏はホッとした面持ちであった。国立機関といえども昨今は人も金もない。収蔵庫は満杯になって数年たつ。スタッフは自分の専門の研究をしながら、隙間を見つけてはアルバイトと一緒に収蔵標本の整理をするのだという。外部の協力がないとなかなか進まないという。オオルリシジミの話に戻ると一時期、収蔵庫がパンク状態で古いコレクションは処分しようという話も出たという。そのとき黒 澤博士は、とんでもない、絶対駄目だ、残すのがここの役目だと言い切ったという。このチョウが会津に生息していたという証拠はこのようにして守られたのである。

博物館と標本の旅は翌 13 日も続いた。東京駅から「はやて」で昼頃に盛岡に着いた。昼食もそこそこに、北上川に沿って北側の郊外にある岩手県立博物館にタクシーを急がせた。1 週間ほど前に当館所蔵の、岩手県絶滅種オオルリシジミについて標本撮影の手続きを終えていたのである。こんもりとした丘の上に、まわりの環境にマッチした素晴らしいデザインの博物館である。ロビーに昆虫担当学芸員の中村学氏が迎え出てすぐ収蔵庫に案内してくれた。高い天井に広々とした贅沢な空間である。そこに自動可動式の書架状の標本棚が連なっていた。オオルリシジミは 10 頭近くあったが、どうしても目玉のチョウだけに陳列する機会が多く、すると光にあたって色褪せてしまう。そこで陳列用と所蔵用を区別するとかカラー写真に収めるなどの適切な配慮をしていた。

当館は開館当初から収蔵庫のこととか積極的な標本収集、それらのデータベース化、目録発行な

ど続けてきた。担当学芸員との話題はさまざまな方面に及んだ。岩手県の著名なレッドデータ昆虫のノシメコヤガとミツモンケンモンがありますか、と質問したら即座にあるといい、実物が目の前に運ばれてきた。同氏の専門は水生昆虫だそうだが複雑多岐な昆虫全般についても、その見事な対応に脱帽した。引き続き重要標本は外部に呼びかけ集めているという。また整理についても外部の協力が欠かせず、利用者の要望に応えるられるように気配りをしていきたいとしていた。

青森県の植物学界で有名な旧青森営林局の村井三郎博士は岩手県の出身である。定年退官されてから盛岡に移られ岩手県の植物学のために最後まで尽力された。その全標本がここに収められていると聞いていたので植物担当の鈴木まほろ学芸員に収蔵庫を案内して貰った。時間もあまりないので「早池峰」「ハヤチネウスユキソウ」をキーワードに標本を取り出して貰った。すぐ出てきた。村井博士直筆のメモ書きも添付されてあった。次いで文献・資料などの収蔵庫も見せて貰ったが、村井蔵書が多く青森県の生物研究にも欠かせない重要文献がズラリと並んでいた。今回はまったくの駆け足だった。是非ともまた訪ねたい標本や資料の宝庫であった。

はからずも今回、日本を代表する科学博物館と東北の地方博物館の一つを訪ねた。目的は貴重な標本撮影だったが、研究に不可欠な標本とか資料がどのように所蔵、整理されているのか、外部研究者へのサービスはどのようなものかなどにも関心があった。スタッフはお忙しいなかを親切に対応し目的を達成させてくれた。

私は、このような用向きで地元の青森県立郷土館をまだ訪ねたことがない。今度、ぜひ捜し物をして見たいと思っている。 (2006 年 12 月 24 日記)